書評

『驚くべきショスタコーヴィチ』

ソフィア・ヘーントワ著　亀山郁夫訳

筑摩書房

平野篤司

これほどの強靭な低血圧症的不機嫌さをどう理解したものだろうか。その音楽の発する圧倒的に刺激的な不機嫌の響きに身を曝し、その力を受けとめればよいのだろう。そして、ショスタコーヴィチを全体的に理解するということよりも、断片ではあっても具体的な知識を得るほうがはるかに有益であろう。小綺麗にまとまった全体像よりも個別の事実のほうが、芸術の真実をあきらかにしてくれるかもしれないのだから。

『驚くべきショスタコーヴィチ』は、通俗的な理解をこえる事実をいくつも教えてくれる。全体のほぼ三分の一ずつが、それぞれ、バービー・ヤール、ショスタコーヴィチと深いかかわりをもった女性たち、そしてサッカー狂いに当てられている。それぞれに、豊富な資料を綿密に読み解き、主題へと収れんさせたものである。その対象に迫ろうとする熱意には、まさに驚くべきものがある。それは、実証的な研究のためというよりは、芸術家への全面的な賛仰の念と傾倒のしからしめる実証的情熱のたまものである。そこには、美しい魂の告白とでもいうべき著者のかけがえのない心情の軌跡をうかがうことができるが、他方、それがゆえの単純化が見られることも否定出来ない。当方の耳に響いてやまぬショスタコーヴィチの不機嫌さは、本書では、もう少し調子の高いところへと昇華されているようである。これは、芸術家とその身近にいた賛仰者のあいだに見られる関係のあらわれのひとつなのだと思えばよい。ともあれ、著者の敬愛の念の深さには打たれずにいられない。

それぞれの主題ごとに、通俗的な理解の水準でも十分興味深い話がふんだんに紹介されている。第一部のソビエト体制とショスタコーヴィチの創作活動とのかかわりでは、なまじの歴史書よりもはるかに迫真的に時代とそのなかで葛藤する芸術家の姿を活写している。第二部では、ショスタコーヴィチをとりまく女性たちのエピソードの数々が人々の物語的関心をとらえてはなさないであろう。

ところが、第三部サッカー狂いのショスタコーヴィチは、それらの主題とは異なっていささか異様である。サッカーへの情熱は、政治とも社会ともかかわりのない完全に個人のものだからである。本書の白眉は、ここにこそあるのではないかと思う。どうして、無償の情熱がこれほど燃え上がることがありえたのか。それは、純粋であるからにほかならない。このような狂いともいうべき情熱は、ひとに説明して納得してもらうことは不可能であろうし、かりにそうしたところで何の効用があるとも思われない。具体的な観戦の記録をこまごまとあげて行くいがいに叙述の方法はないのであろう。政治とのかかわり、ときには、音楽とのそれさえも顧みずに、サッカーに入れあげるショスタコーヴィチの姿には、妙に心を揺すぶられるものがある。その描写は、本書のなかでももっとも緻密である。

このサッカーに対するいささか常軌を逸した熱狂ぶりと音楽にあらわれる不機嫌さは、端倪すべからざる芸術家の裏と表の関係であろうと評者は推測するのである。驚くべきことであると思う。